

## 第十七章

国家の富をどのように定義すべきかという問題——フランスの重農主義者が製造業従事者を不生産労働者とみなした理由は、表面的なものにすぎない——職工や製造業従事者の労働は、国家全体から見れば必ずしも生産的ではないとしても、個人にとっては十分に生産的である——ブライス博士の『復帰支払に関する考察』全二巻に記された注目すべき一節——アメリカの幸福と急速な人口増加を、主にその特殊な文明段階に帰したブライス博士の見当違い——社会改良の途上にある困難から目を逸らしても、何の得にもならない

ここで問われているのは、国富を土地と労働の年産の交換価値で測るべきか、それともフランスの重農主義が主張するように土地の総生産で測るべきかという点である。重農主義の定義に従えば、富の増加は労働維持資金の拡大に直結し、常に働く貧困層の生活水準を引き上げるが、スミス氏の定義では必ずしもそうはならない。しかし、この一点だけを理由にスミス氏の定義を退けることはできない。衣服や住居を収入から除外す

るのは適切ではなく、食料ほど価値が大きくなっても収入の一部とみなすのが妥当である。したがって、スミス氏と異なるのは、社会の収入や資本（蓄積）の増加をすべて労働維持資金の増加と同一視し、その結果が常に貧困層の生活改善につながるとみなす点にすぎない。

富裕国の絹や綿、レースといった装飾的な奢侈品は、年々の産出の交換価値を大きく押し上げるが、社会全体の幸福をそれほど高めるわけではない。どの労働が生産的かは産物の実用性で測るべきだとする立場がある。フランスの重農主義者は製造業の労働を非生産的とみなすが、農業労働と比べれば結論には賛成できるものの、その理由は異なる。彼らは、農業では賃金や農場経営費を支払ったあと地主に純地代が残るから生産的であり、レース製作は職人の食料や雇い主の資本を補うだけで明確な地代を生まないから非生産的だと説明する。しかし、たとえ完成したレースの価値が賃金や雇い主への支払いをすべて賄い、さらに第三者にも明確な地代を支払えるほど高価であっても、農業労働に比べればやはり非生産的である。重農主義の論理ではこの場合レース職人は生産的に見えるが、彼ら自身の国富の定義に照らせばそうは言えない。職人は国土の総生産に何も付け加えておらず、総生産の一部を消費し、その代わりに小さなレース片を残

したにすぎない。たとえそのレースが製作中に消費した食料の三倍の価格で売れ、本人にとっては採算が合っても、国富の本質的部分を増やしたとは言えない。したがって、生産費を差し引いたあとに生む純地代だけでは、国家の観点から労働の生産性は判断できない。

仮に、少数の富裕層の見栄や虚栄に応える高級工業品や贅沢品をつくる二十万人の労働者を、瘦せた未耕作地の開墾と農作業に振り向けたとする。彼らが生産する食料が自家消費の倍にとどまるとしても、国家の生産性と純貢献はやはり高まる。第三者に地代が生じず、投入した食料の倍を再生産できるにすぎないという前提でも結論は変わらない。従来、彼らは国の食料を消費し、その見返りに絹やレースといった高級品を残したにすぎなかったが、農業に転じれば同量の食料を消費しつつ、さらに十万人を養える食料が新たに残る。どちらが国益や実質的な利益に資するかは明らかであり、絹やレースづくりを支えていた富や資金は、彼らが追加の食料を生み出すために投じるほうが有効である。

土地に投じた資本は、出資者自身の収益が少なくても、社会全体には大きな成果や利益をもたらすことがある。一方、商工業に投じた資本は、個人には高い収益や大きな利

得をもたらす一方で、社会全体への貢献が小さい場合がある。そのため、フランスの経済学者の考えに従い、農業に比べて商工業の労働を相対的に非生産的とみなすことになる。実際、商業の世界では巨万の富が生まれ、多くの商人が奢侈な暮らしをしている以上、製造業者が生活費や設備の維持費を極端に切り詰めることでしか富を得られないという見方には同意しがたい。そもそも商業の多くの分野では、第三者に一定の地代を支払えるほどの利潤が見込めるにもかかわらず、実際には第三者が介在しないため、利潤は工場主や商人に集中する。その結果、彼らは大きな節制を強いられることなく富を築きやすく、特段に儉約家として知られていない人でも商業で巨財を成す例は少なくない。

日常の経験からも、商業や製造業の労働は個人の収入には直結するものの、国家全体の生産力にはそれと同程度には寄与しないことがわかる。食料が増えれば社会の利益はただちに広がるが、取引で得た富の効果は間接的で不確実であり、場合によっては逆効果にさえなる。多くの国で最も重要なのは国内の消費を支える取引であり、中国は対外貿易がほとんどなくても世界で最も豊かな国の一つとされている。そこで外国貿易をいったん脇に置けば、既存の食料備蓄から取り分を製造の工夫によって二倍に増やす人よりも、その備蓄に労働によって一つ分を新たに加える人のほうが、国家にとっては確実

に有益である。絹やレース、装身具や高価な家具といった消費財も社会の富の一部ではあるが、それは富裕層の富であって、社会全体の富とは言えない。だから、この分野の富の増加は、多数の国民にとって主要な富の源である食料の増加と同列に論じることができない。

対外貿易は、スミス氏の定義では国家の富を増やすものとされるが、経済学の一般的な理解では必ずしもそうではない。高く評価される主な理由は、他国の労働力を動員する力を強め、対外的な国力を高める点にある。しかしよく見てみると、国内の労働を支える実質的な原資はそれほど増えず、多くの国民の幸福にもわずかしか寄与しない。本来、国家が自然に豊かになる順序は、まず土地の高度な耕作が進み、次に製造業が育ち、最後に外国貿易が発展するというものである。ところがヨーロッパではこの順序が逆転し、本来であれば土地に投じた資本の余剰から製造業が育つべきところを、実際には製造業で生じた余剰資本によって耕地の開墾や土壌改良が進んだ。都市の産業が優先的に奨励された結果、職工の賃金が農業労働者より高くなり、それが未耕地の多さを招いた主な原因とみられる。もし別の政策が大陸全体で採用されていれば、ヨーロッパの人口は今よりはるかに多くなっていたはずだが、過度の人口圧力に悩まされることはなかった。

ただろう。

人口に関する困難という重要な主題には、自身の能力を超えるほどの綿密で正確な検討と、的確で説得力のある議論が必要である。この議論の締めくくりとして、プライス博士の『復帰支払に関する考察』全二巻に記された特筆すべき一節に触れざるを得ない。都市部と農村部の生存確率の表を示したあと、同博士は次のように述べている（第二巻二百四十三頁）。

この比較は、「大都市は人類の墓場である」という古い言葉が現実と一致していることを示している。そして第一巻第四編の末尾で指摘したように、私たちの病気を自然の本来の意図とみなすのは、厳密には正しくない。病気の多くは、疑いなく人間自身が作り出しているものである。もし住民が自然で節度ある生活を一貫して守る国があるなら、与えられた寿命を全うする前に死ぬ人はごくわずかになるだろう。そこでは痛みや病はほとんどなく、死の原因は避けがたい緩やかな老衰だけとなり、眠るように静かに訪れる。

プライス博士の『考察』第二巻を注意深く読んだ結果、正反対の結論に達せられている。人口と食糧は異なる比率で増加し、均衡は不幸や悪徳によってしかかろうじて保た

れないのではないかという、以前からの漠然とした疑念は、同書を熟読するうちに確信へと変わった。抑制がなければ人口は驚くべき速さで増加し、自然の一般法則として過剰人口を抑える仕組みが存在することを示す事実や証拠がこれほど多いにもかかわらず、博士が先に引用したような一節を書いたことは理解しがたい。博士は悪徳の防止策として早婚を強く勧め、ゴドウィン氏のように性欲の消滅を空想することもなく、コンドルセ氏の回避策に頼ることもせず、自然の繁殖力が十分に発揮されるようにすべきだと繰り返し返していた人物である。それにもかかわらず、人口が無制限に増加する場合、人間がどれほど努力し工夫を凝らしても大地が供給する食糧の増加は到底追いつかないという、明白かつ必然の結論を見落としたことは、ユークリッドの最も平易な命題の結論を否定するに等しいほど不可解である。

プライス博士は文明の段階を論じて、「文明の初期、つまり最も単純な段階が人類の増加と幸福を最も促す」と述べ、当時のアメリカ植民地をその最初にして最も幸福な段階の実例とし、文明段階の違いが人口に及ぼす影響を示す有力な証拠とみなした。しかし、アメリカ人の幸福は文明度そのものではなく、新しい植民地に肥沃な未開墾地が豊富にあったという条件に大きく依存していた点が見落とされやすい。ノルウェー、デン

マーク、スウェーデンの一部地域、さらにはイギリスでも、二百年から三百年前にはおむね同程度の文明水準に達していたが、同様の幸福や人口増加は起こっていない。博士自身もヘンリー八世時代の制定法を引用し、耕作の衰退と生活必需品の高騰によって「驚くほど多くの人々が自活も家族の扶養もできなくなった」と記している。アメリカで広く行き渡っていた強い市民的自由は各州の産業、幸福、人口を押し上げたが、どれほど強い自由であつても新しい土地を生み出すことはできない。したがって、独立後のアメリカ人がイギリス支配下の時代よりも一段と大きな市民的自由を享受しているとしても、人口が当時と同じ速度で長く増え続けるとは考えにくい。

二十年前のアメリカで、下層階級の暮らしが満ち足りて見えた光景を目にした人は、その水準を保つには製造品や贅沢品の流入を止めればよいと思つたかもしれないが、そのような期待は、妻や恋人を日にも風にも当てずにいれば老いないと思ひ込むのと同じくらい非現実的である。統治が行き届いた新しい植民地の繁栄は青春の盛りのようなもので、その勢いは誰にも止められない。政治の仕組みも社会の慣習も、老いを早めたり遅らせたりはできても、永遠の若さを保つことはできない。ヨーロッパは都市の産業を農村よりも手厚く奨励した結果、早く老い込む傾向を招いた面があるが、そこを改めれ

ば、各国に新たな生命力と活力がもたらされるだろう。長子相続などの慣行のもとで土地が独占的な価格を帯びているかぎりには、個人が土地に資本を投じて採算が取れにくく、土壌は十分に耕されない。文明国には所有者階層と労働者階層が避けがたいとしても、財産の配分がより均衡に近づくことには持続的な利点がある。所有者が増えれば労働者は減り、財産を持つ幸福な人びとが増え、労働以外に拠りどころのない不幸な人びとは減る。それでも欠乏の圧力は、どれほどの確な努力をしても和らげられるだけで、完全に消し去ることはできない。人間の現実の境遇と自然の一般法則に照らせば、どれほど賢明な施策を取ったとしても、人々が「多くが天寿を全うし、苦痛や病はほとんどなく、死は避けがたい緩やかな老衰として眠るように訪れる」という境地に至るとは考えがたい。

社会の抜本的な改善や大きな進歩を阻む主な障害が人の力では当面克服しがたいという現実、確かに落胆を招く。人類の個体数が生存資源の限界を超える勢いで増える傾向は生物界に共通する性質であり、当面変わる見込みはほとんどない。だからこそ、人類の向上や改善に真剣に取り組む人ほど、この不都合な事実を取り繕ったり脇に追いやったりしても無駄だと認めるべきである。逆に、不快だからといって現実から目を逸ら

せば、より深刻で甚大な被害を招く恐れがある。この大きな障害が存在するとしても、人類のためにできることはまだ多く、日々の努力は欠かせない。ただし、直面する困難の性質や範囲、規模を正確に把握しないまま進んだり、成功の見込みのない目標に無計画に力を注いだりすれば、徒労に終わって力をむなしく費やすばかりか、望みに届かないどころか、シシュポスの岩のように何度も押し戻されることになる。